

実践記録を書く方法とその本質 — 「社会福祉援助技術」の授業実践の報告 —

柏 木 恭 典

Method of writing text about practice and the essence Report of my teaching practice of "Social work"

Yasunori KASHIWAGI

Abstract

This report will be shown about my teaching practice of "Social work" done last year. And, this paper tries to describe the method of writing a text about student's experience as caseworker. In this report, the student's description is classified into an objective description, a subjective description, and a relation description. And, the method of writing the text will be clarified according to the classification.

はじめに

本研究ノートでは、幼稚園教諭・保育士等、教育や福祉にかかわる実践者を養成する教育機関における「記録の書き方」の指導の内容を報告する。本ノートは、研究論文とは性格を異にしているため、主に筆者自身が行っている教育活動そのものに焦点を当てて、記録の書き方についての指導を反省し、今後の教育活動の可能性を探りたい。

1. 学生の文章能力について

本学の学生の記述能力は極めて様々である。文章能力に優れた学生もいれば、小学生と同等の文章を書いている学生もいる。私自身、毎回講義ではコメントカード(授業後のリフレクションペーパー/質問紙)を書かせており、学生の文章能力の理解に常に関心を向けているが、「書けない学生」は、われわれが想像する以上に、事柄を言語化し、表現し、言葉で事柄を再現することができない。主語と述語しか書けない学生も毎年数人はいる。さらには、「が・の・に・を」が使えない学生、接続詞を使

用して長い文章を書くことができない学生など、基本的な文章すらまともに書けない学生は決して少なくない。

こうした学生の文章力—実践記録を書く力—を向上せしめることは、表立ってカリキュラムに表記されているわけではないが、教師や保育士を育成する教育機関においては必要不可欠であり、また実践者養成に欠かせない要素であろう。

本学こども学科も、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士等、「教育・福祉実践者」の育成をその任務としている。数度にわたる現場実習も、本学科学生はほぼ全員、必修科目の一つとして行わなければならない、当然「記録を書く」ということも実習を行う学生全員に課せられることになる。したがって、実習記録/実践記録は、われわれの教育内容に含まれるものであり、その指導も必然的に行わなければならないのである。

2. 実践記録を書く以前の留意点

私が行う記録の書き方の授業では、クマとネズミのぬいぐるみを使って、その場面を記述するというレッスン

を行っている。クマとネズミのワンシーン (=「シチュエーション」) を描写することがとても重要となる。その内容については後に述べることにしたい。

また千葉という地理的条件、短期大学という事情、学生や学校の雰囲気なども大きく影響していると思われるが、本校の学生のレベルを考慮した上で、以下のことについて事前に話しておく。

記録を書くことの前提は、「書かれるもの」(対象)、「書く行為」(行動)、「書く私」(主体)がある、ということである。学生の中には、主語と述語を用いて文章を作ることでもできない者もいる。とりわけ、文章を書いているうちに、主語が何なのかが分からなくなり、文章に論理性がなくなってくるのが少なくない。文章を書くことが苦手な者ほど、不必要に文章が長くなり、ふさわしい主語も適切な接続詞もなく、後で読み返しても理解できない文章を書く。そのような理由から、まず上の三つを明確に区分することを教える。

「書かれるもの」は、それが幼稚園であれ、保育園であれ、社会福祉施設であれ、児童福祉施設であれ、子どもたちや利用者の姿である。それが子ども同士のケンカであることもあれば、運動会やお遊戯会だったりすることもある。保育者と子どものかかわりだったり、子どもたち同士のかかわり合いだったりすることもある。これらはすべて、学生が見た世界と考えてもよいだろう。学生が(単なる感想文に陥らずに)何かを書くためには、書くべき対象を明確にしておく必要がある。講義では、「書かれるもの」は、「書くべきもの」だと説明する。そして、書くべき事柄を吟味し、ポイントをしばっていく。

「書く行為」は、書くという実践そのものである。上の「書かれるべき対象」を書くという行為である。われわれは常日頃から書くことをしているわけではない。本学の学生においては、「書くこと」はむしろ非日常的なことであることが多い。日記をつけている学生も少なくないが、思ったことや感じたことをそのまま自然の仕方でも書き綴っている程度である。最近では、mixiやブログなどを開設して、日々パソコンで文章を打っている学生もいるが、たいていの場合、日記よりも文章そのものの質が低いので、これを教員は信頼することができない。mixiやブログなどネット上の文法構造は、一般的な文書の文法構造

とは異なっており、この溝・乖離を埋めることもわれわれの任務となってきているように思う。

授業で尋ねてみると、これまでは、多くの学生は日常的に文章を書いていない、又は、文章を書くということが日常化されていない場合が多かった。日記を書いている学生もいるがその数は極めて少なかった。しかし、パソコンや携帯電話の普及と重なって、ホームページやブログやmixiなどのメディアを利用して、日々「書く実践」(あるいは「打つ実践」)を行っている学生は近年徐々に増えてきている。2007年度の保育コース一年生の40パーセントくらいの学生たちがそういったメディアを利用していた。また、携帯電話のメールサービスを利用する学生はほぼ100パーセントで、文字を使用しない学生はほぼいないと考えて良さそうだ。

だが、そうはいても、しっかりと文章をきちんと書くことができている学生がたくさんいるわけではない。彼らが書く文章は、日常的な話し言葉や若者特有の流行的な文体となっている。また字体そのものも時代の影響を受けている。文字そのものも文章の意味内容も、若者に特徴的な傾向がある。実践記録を書くにあたっては、まず何よりもこうした自分の傾向に気づくことから始めなければならない。つまり、「書く私」をしっかりと意識化させなければならない。「私はどのように書いているのか」、ということに目を向け、自分が一体どのような書き方をしている、どのような癖をもっている、どのように書く傾向があるのか、といったことを意識化していくことが大切である。

以上、「書かれるもの」、「書く行為」、「書く私」の三つを分節化してみた。この分節化は、実習記録を書く上で前提条件であり、繰り返し学生たちに伝えている事柄である。

3. 「クマとネズミのぬいぐるみのワンシーンを記述してみよう」

実践記録を書くということは、ある状況を書くということであり、その状況を私がどのように見たか、解釈したかを示すことである。いや、書くという行為そのものが理解の遂行である、と筆者は考える。当然、学生の実習記録の場合、何を学んだか、何を教えてもらったかと

いったことも記すべきであろうが、結果としては、基本的に学生たちがその日一日をいかに生きたか、いかに実習を行ったか、いかに他者とかがわったか、いかにその他者を理解したか、といったことが記されることになる。本学「保育実習ⅠB」の指導では、とりわけ「際立った出来事」（その日に一番印象に残った一つの出来事）を書くよう、学生たちに要求している——これは実際の実習記録でも使用する形式である。というのも、実践記録の書き方は非常に様々ではあるが、何らかの出来事を書くというのはあらゆる実践記録に共通する点であるし、出来事を時系列的に箇条書きで記していくことよりも、焦点をしばり、書く内容を限定して、それを丁寧に記述するほうが、学生たちにとってより深い学習になるし、実践を見る力（個別のケースに対応する力）も養われるからである。

そうした記述を可能にするためにも、できるだけシンプルな場面を設定すべきである。書くことの〈基本〉を学ぶ上では、できるだけ書く出来事を複雑にしないほうが学生に伝わりやすいはずである。施設見学や施設観察を行う以前に、観察そのもののあり方がしっかりと理解されなければならない。

そこで、私が設定する場面は、以下のようなシチュエーションのクマとネズミのぬいぐるみである。壇上の机の上に、大きなクマのぬいぐるみを学生の方に向けて置いて、座らせる。そして、両足の間に小さなネズミのぬいぐるみを置く。ネズミは、クマの膝元でうずくまるような姿勢にしておく。ネズミの顔は、学生の側からは全く見えないようにしておく。



上の写真のような仕方でクマとネズミのぬいぐるみを教壇の上に置く。そして、次のように指示を与える。

「ここにクマさんとネズミのぬいぐるみを置きました。これについて書いてみてください。ただし、今回は、「かわいい」や、「素敵」といった感情的な言葉を使用するのは、やめてください。あるがままに書いてみてください。できるだけ客観的に書くように心がけてください。感想文はNG。客観的というのは、時間と空間を重視するということです。いつ、どこで、誰が、どのように、誰とどうしているのか、といった点に注意してみてください。でも、客観的になり過ぎないように書いてください。そして、問いや疑問をもって、この場面をしっかりと見てください。」

この私の指示は、あまり学生たちにはよく理解できない指示になっている。「客観的」、「ありのまま」、「時間と空間」といった（学生たちにとっては）不思議な言葉が羅列されている。最後の「問いをもって」という言葉も、学生たちの頭を素通りすることを念頭に置いて発している。そこで、ホワイトボードに、「主観的記述」、「客観的記述」、「関係的記述」という言葉を書き、以下のことを説明する。

主観的記述とは、「このクマはかわいい」や「このネズミは私好きじゃない」といった記述であり、述語（かわいいと思うこと）が相手のクマにではなく、自分の側に属しているような記述である。概して、学生たちが何かを書く場合、「私は・・・とを感じる」、「私は・・・と思う」、「私は・・・ということを考えた」といった文章になる傾向が強い。いわゆる「感想文」のような文章である。本学の学生のみならず、他の短期大学の学生の文章を読んでもその傾向は確認できる。学生が書いた文章の末尾だけに注目すると、「・・・と思った」、「・・・と感じた」ばかりであるケースも決して少なくない。クマのぬいぐるみを学生たちに提示して、「このクマさん、どうかな？」と尋ねると、まず出てくる言葉は、「このクマ、かわいい」である。そして、「茶色い」、「ちいちゃなネズミがいる〜」、「なんでクマとネズミなんだろう？」といった言葉が続く。

素朴な感想としては「かわいい」で十分である。クマのぬいぐるみは「かわいい」と思われるように作られているし、やわらかくて、ふわふわしており、目がつぶらで、丸みがあり、「かわいい」という概念を満たす要素がふんだんに盛り込まれている。こうしたクマのぬいぐるみを「かわいい」と感じるの、素朴な主観的態度としてはノーマルであり、極めて素朴である。クマのぬいぐるみは「かわいい」と思われるように初めから作られているのである。重要なのは、学生たちが、「クマのぬいぐるみをみたら、かわいいと思う」と感じる経験を対象化することである。さしあたって本講義では、まずこの素朴な主観性から出発することになっている。

客観的記述は、反対に、その述語がクマに属するような言葉となっているような記述である。学生の感想にあった「茶色い」が、まさに客観的記述である。「このクマは茶色い」という記述の「茶色」は、書き手のわれわれに属するのではなく、クマに属する言葉である。また、「毛で覆われている」、「大きい」、「目が黒い」といった言葉もやはりクマに属する概念であり、客観的記述と考えてよい。このように説明していくと、学生たちは「なるほど」というような表情を見せてくれる。「自らに近い言葉」と「対象に近い言葉」という区別は、主観性と客観性を説明する上でとても分かりやすい分節化のようだ。

関係的記述は、ここでは「x」としておく。というより、「x」にしておくことで、目指すべき方向性を提示する。実は、主観的記述も客観的記述もどちらも実践者の実践記録にはふさわしくない、という「否定」が後になされるからである。ただ、ここでは、問いや疑問をもつということだと、示唆しておくに留める。

学生たちは、書いたことや話したことを懸命にノートに書き込んでいるが、おそらくほとんどの学生にはあまりピンとこないことのように思われる。しかし、この時点で、私が何を言わんとしているのかを学生たちが理解する必要はない。「とりあえず、書いてみよう。主観的な記述にならないようにしてね」、とだけ言っておく。学生たちは、少し困りながらも、指示されるがままに、クマとネズミのぬいぐるみの一場面を記述し始める。

学生たちに書くために与えた時間は30分。このように

時間的な制約を与えることで、全員に共通の制限を与えることになる。同じ時間の中で、書かれた内容の質が違ってくことをねらいとしている。同じ学生でも、同じ時間が与えられても、記述の内容はガラリと変わってくる。その違いを明確にするためにも、やはり時間的な制約を課した方がよいと思う。

30分が経過したら、書くことをやめてもらう。そして、そのまま書いた紙を回収して、この日の授業を終える。私は回収された用紙をすべて読み、優れた記述を含むものとスタンダードなもの（学生にとってのスタンダードなもの）と明らかに問題となりそうなものを三つに分ける。次回の授業では、問題のありそうなものと優れた記述を含むものを全員の前で読み上げる。そして、問題のありそうな文章の何が問題なのか、優れた記述を含む文章の何が優れているのかをはっきりと指摘することにする。スタンダードなものは全員に返却する——問題のない記述がいかに関係を含んでいるかということを示すために返却する。

4. 学生の記述のフィードバックとリフレクション

私はフィードバックに90分まるごと使うことにしている。フィードバックは、「記録を書く」という課題においては非常に重要な役割をもっている。以下の内容は、「クマとネズミのぬいぐるみのワンシーンを記述してみよう」を行った授業の翌週の授業のものである。

まずは問題のありそうな学生の記述を匿名でみんなに読み聞かせる。

11月29日木曜日、9時、千葉経済大学短期大学部のA15教室で、私は柏木先生の「社会福祉援助技術」の授業を受けている。柏木先生はクマを持ってきて、机の上に座らせた。クマは、机の上にとっしり座り、赤いリボンをつけ、ネズミくんを抱いている。9時から9時50分までは、先生の話静静地に聞いていた。(Aさん)

このAさんの記述は、上の数行のみであった。他の記述の半分以下であった。記録を書く上で、書くスピードはやはり考えるべき事柄である。実習に行く学生の中に

は、ダラダラと意味もなく時間をかけて（深夜に至るまで）記録を書き、睡眠不足のまま、実習を行う、という者もいる。Aさんには、まず「書くことに慣れる」ということの大切さを伝えた。普段から文章を書いていない人は、やはり書く場面に立たされてもなかなか書けない。案の定、Aさんは普段からほとんど何も書くことをしていない学生だった。本学生の場合、本を読まないのみならず、普段から文章を書くことさえしていない学生も決して少なくない。まず量的にたくさん書けない人は、自分が書けないということをしかりと自覚してもらいたい。

また、この記述には、クマとネズミの状況的な記述がほとんどない。クマの状況を述べているのは、「クマは、机の上にどっしり座り、赤いリボンをつけ、ネズミくんを抱いている」という記述一行のみだ。Aさんは、「見えている状況をありのままに書く」ということにまだ目が向けられていない。

次のBさんの記述も、「ありのままに書く」、「そのものを書く」ということに失敗しているケースである。これも、非常によく見られる記述パターンであり、毎年このような記術に遭遇する。

千葉経済大学短期大学部の敷地内にクマのぬいぐるみがある。さらに詳しく言えば、A15のホワイトボードの前にある机に座っている。今日は2007年11月29日木曜日である。只今の時刻は午前10時6分45秒であり、本日の授業、社会福祉援助技術は一限目である。その担当の先生の名前は柏木恭典という。この授業のはじめに柏木研究室から持ってきたクマのぬいぐるみを学生たちは不思議そうに見ている。何に使うかを知らないまま、授業は進められていく。いつも授業の終わりに書いているコメントカードについて深く突っ込んでいく。およそ一時間コメントカードについて話し合い、これからクマのぬいぐるみについて話が進められる。それは、このクマのぬいぐるみを客観的に述べるというものであった。

そのぬいぐるみは、千葉経済大学短期大学部の学生、およそ40人の人たちから熱い視線を受けている。真正面から見るそのクマのぬいぐるみは右肩に赤いリボン

をしている。（Bさん）

Bさんは、「クマとネズミのシチュエーションを客観的に書け」という指示が与えられたにもかかわらず、Aさんと同様、そのシチュエーションの記述はほとんど見られない。第二段落、最後の数行のみ、ぬいぐるみの記述が確認されるものの、それ以外はぬいぐるみのシチュエーションの周辺的な事柄ばかりである。この記述を学生に読み聞かせたあと、「あるがままに記述する」ということの意味を説明する。このBさんの記述のようにシチュエーションの周辺部分（背景）の記述に終始してしまう学生は比較的多い。「そのものを見つめる目」、「あるがままのシチュエーションを記述する」ということの意味をしかりと理解させる上でも、こうしたBさんの記述は読むに値すると私は考える。

さらに、目の前のありのままの出来事を歪曲して（拡大解釈して）記述する学生もいる。「ネズミの人形は、ネズミの格好をした人間のフジテレビのポンキッキーズに出てくる爆チュー問題がモデルになった人形だと思われる」。この記述は、論文の記述では許されるかもしれないが、実践記録としては蛇足であろう。そのネズミがいかなるモチーフで作られたかは、ここでは問題ではない。もちろん、「情報」としての価値はあるかもしれないが、実践記録で書くべき事柄ではないはずである。さらには、「もしこれがぬいぐるみではなく、生きていたら、確実にネズミは食べられていると思う」という記述もあった。想像力はとても豊かだと思うが、実践記録の記述ではない。このシチュエーションにおいては、まぎれもなくクマとネズミは何らかの関係性を生きていると誰もが（共通感覚的に）感じるからである。また、「先生が今日もってきた人形は、保育園や幼稚園に通っている子どもが好きそうだ。実際、私がおよそ4歳の時も、犬の人形をよくもっていたのを思い出した」、という記述もある。こうした記述の問題性についても、時間が許されれば、丁寧に指摘するようにしている。（人形をシチュエーションの中で理解することをせず、自分の感覚にひきつけすぎている。また思い出された内容も「感情移入」によるものであり、目の前の事実をありのままに捉えることとは何の関連性もない）

こうした問題のありそうな記述を読み上げた後、続けて、卓越した内容を含む記述を紹介していく。下のCさんは、「受け身」の文法で、クマとネズミのぬいぐるみのシチュエーションを描いていたり、「～のようにみえる」といった表現を使っていたりしており、読むに値すると判断した。

学生50人に見つめられながらそのクマはホワイトボードの前にある教壇の上に柏木先生の手によって置かれた。クマは学生全員をおそらく見渡すことのできる特等席に座っている。クマは茶色の色の中でも明るい色でも暗い色でもなく、中間の色をしたこげ茶色をしているぬいぐるみである。毛並みが立っているのでおそらく柔らかいだろう。首には赤いスカーフが巻かれていて、おしゃれなぬいぐるみである。両手両足を前に出し、座っている姿勢を保っているが右手が左手より少しだけ下がっている。クマの左足には灰色で小柄というよりは細長いネズミがしがみついている。見た感じではそのクマのことを母親（親）のように愛おしくて抱きついているようだ。（Cさん）

このCさんの記述には、先の二人の記述に比べると、クマとネズミそのものを記述しようとする態度が垣間見える。記述のほとんどがクマとネズミに関する事になっている。この記述を通して、とりわけクマの様子が目に浮かんでくる。

この記述でもう一つ注目したい点がある。それはCさんの文章表現力である。Cさんは、「クマは教壇の上に先生によって置かれた」という受動態の文章を書いている、ということである。講義では、このCさんの受動態の使用についてかなり強調して評価した。クマの側からすれば、紛れもなく「置かれた」のであり、ここでは教壇の上に置いたのが誰かは極めてどうでもよいことなのである。また、「おそらく・・・だろう」という推量表現も注目し値する。こうした推量表現があるだけでも、文章全体がピリっとしてくる。また、「見た感じでは、・・・ようだ」という自分自身の「見え」も記述可能である。こうした「主語は、～のように（私に）見える／思われる」

という文章表現は是非とも書いてほしい、と学生たちに伝えている。また、別の学生は、「このクマはきっと雄だろう。なぜなら、このクマは3周り以上小さいネズミのぬいぐるみを大事そうに抱えていることから男らしさを感じるからであり、手足が太く、女らしくはないと感じられるからである」と書いている。ここで使われる「なぜならば・・・だからである」（因果表現）も、学生たちからはなかなか出てこない表現である。こうした表現も学生たちの前で高く評価するように心がけている。

下のDさんはさらに注目に値する。Dさんの記述は、これまでの学生とは違い、「どう見えたか」ではなく、「何が見えなかったか」を書いてくれている。

・・・クマの足のつけ根に顔をふしているネズミの色は灰色で、耳の中と足首から下の部分は肌色である。しっぽのところに紙のタグがついていて、首にスカーフのような物をつけている。顔の表情は、クマの足に埋もれているのでわからない。A15教室の右から五番目、前から5列目の席から見るネズミは、足が2本、耳が2こ、足が一本見ることができる・・・。（Dさん）

この記述で注目すべきは、Dさんが「顔の表情は、クマの足に埋もれているのでわからない」と問うているところである。多くの学生たちは、Dさんのように、文章の中で自らに問いかける言葉を書いたりはしない。文章が生き生きとしたものになるかどうかの境目に、こうした問いかけがあるように思われる。実践記録は、生きた人間の記述を目標にしている。ゆえに、分かる部分や見える部分だけでなく、分からない部分や見えない部分を書くこともできるのである。いや、逆に分からない部分や見えない部分が書き手に明確になることで、次の実践の可能性が見えてくるのである。Dさんは、ネズミを見て、ネズミの表情が見えていないことに気付いたのだ。おそらく他の学生も顔が見えないことに（潜在的には）気付いていただろう。それをきちんと明文化するかどうか、それが問題なのである。分からないことを分からないときちんと認識できるかどうか、という問題でもある。

自分が分かったことや見えたことだけを書くのが実践記録ではない。逆に、自分には分からなかったことや見

えなかったことや見えなくなったことも実践記録に書いてよいのである。いや、よりよい実践記録にするためには、こうした不明瞭な点をしっかり記述に盛りこむべきである。というのも、そうすることで、読み手と書き手が共にその実践について議論することができるからである。真のレトリックは対話や議論を導くものである。実習指導などにおいては、よく「分からないことがあったら、すぐに先生方に尋ねる」ということを指導するが、分からないことは記録に書いて残していく、ということも大切な学びなのであり、またその記述を通して、現場の実習担当者から学ぶことができるのである。

だが、分からないことを書くだけでなく、それを越えて、「問いを立てる (Frage stellen)」こともできるのである。今日、学生だけでなく、われわれ全般が、問いを立てることよりも、問いに答えることに必死になっている。誰もが質問されることを待っている。ゆえに、「問いを立てる」ということを学生たちに教えることはとても難しい。ともすると、大学機関のほとんどがそれに失敗しているかもしれない。それほどまでに、われわれには、問いを立てることを学ぶことは難しいのである。これを「問題意識の欠如」と言ってもいいかもしれないが、事態はより深刻であるようにも思う。

下のEさんは、たどたどしくも、クマとネズミの場面を見て、自ら問いかけ、その問いそのものを記録として書き残している。文章を書くことに長けている人間にとっては、ごくありきたりの普通の文章のように感じられるかもしれないが、こうした問いをもった文章を書ける学生というのは実はとても少ないのである。

…クマの足には灰色のネズミが寄りかかっている。机の上に座っている茶色のクマは首に赤いリボンをつけている。ネズミは一体何がしたいのだろうか。そして、クマは黒い目で姿勢をよくして、学生の方を向いて、じっと見たまま動かない。何かを考えながら見ているのだろう。座っているクマに対して、ネズミは立っている。顔が見えないのは、はずかしくて隠しているのだろう。(Eさん)

続けて、同じく記述の中で自らの問いを立て、自らの

解釈を列挙している学生がいた。Eさんと若干記述の仕方が違うところに注目したい。

…茶色のクマのぬいぐるみと白っぽい小さなネズミはずっとわたしたち学生の方を向いている。クマのぬいぐるみから見たわたしたち学生はどのように見えているのだろう。そして、ネズミはどうしてクマのぬいぐるみに抱きついているのだろう。ネズミにとってクマは仲のよい友達なのだろうか。頼りになる存在なのだろうか。私はこのことが気になった。(Fさん)

上の二人の記述には、「問い」がはっきりと明記されている。Eさんは、「ネズミは一体何がしたいのだろうか」と問いを立てている。この問いは、Eさんがネズミに関心を寄せているということを示している。クマの膝元にうずくまっているネズミをみたEさんは、ただ教師から出された指示に従い、あるがままに書くことに終始するのではなく、Eさん自身がネズミのことを気にかけたのである。これまでの学生の記述と明らかに違うのは、まさにこの点であり、Eさん自身がクマとネズミの関係にかかわろうとしているのである。実践記録は、まさにその書き手のかかわりを顕在化するのである。Eさんは、傍観者ではなく、実践者として生きているのである。実践者は、まさに目の前の出来事にかかわりゆく存在者である。Aさん、Bさん、Cさん、Dさんの記述は、いずれも遠くから、外から、断定的、規定的に書かれたものであった。クマとネズミという存在者と自分という存在を切り離し、自分という存在を記述に含み入れることなく、対象的に事柄を捉えて、記述していた。そういう意味で、Eさんの記述は、自分自身の問いを記述に含みいられていることから、「関係的記述」になっているのである。

Fさんも同じように問いを記述の中に含みいられている。「ネズミはどうしてクマのぬいぐるみに抱きついているのだろう」という問いは、Eさんの問いよりも、より関係的な問いになっている。ネズミを理解するためにも、このシチュエーションでは、クマとのネズミの関係性は決して無視することはできない。このように、問いを立てて、関係の中に歩み寄ろうとする態度で書いた記述を、

本授業では「関係的記述」と命名して、「主観的記述」、「客観的記述」と区別して考えることにしている。というのも、問いを立てるということはその関係の中を生きるということの意味するからである。ここで、主観的記述（「かわいい」、「好き／嫌い」）、客観的記述（「クマは茶色い」、「ネズミはクマよりも小さい」）とは別の記述がある、ということをしかりと示す。

また、さらにFさんは、問いに対する可能な答えを書いている。問いを立てるだけでなく、可能性を立てているのである。実践記録の指導では、私は常に「可能性の列挙」の重要性を挙げている。Fさんは、「ネズミはどうしてクマのぬいぐるみに抱きついているのか」という問いに対して、二つの可能性を立てている。ネズミにとってクマが仲のよい友達だからか、それとも、頼りになる存在だからか、と。ここまで記述が明確になると、この記録を基にして、議論することができるだろう。あるいは、こうした問いをもつことで、Fさんは次にすることが自ずと見えてくるようになる。次のGさんは、30分という限られた時間の中で、以上述べたことを一通り網羅しており、可能性の幅も広いので、学生たちの前で読み上げる。

教卓の上に、やわらかいこげ茶色のクマの人形がある。見た目はふわふわとしていて、触ると気持ちよさそう。このクマの人形は、目が黒くて、まん丸であるが、目の上の毛が少し目にかかり、切ない表情にも見える。切ない表情に見えるからか、目にうつる光が涙にも見えてくる。

クマの人形は座っている。足と足の間にネズミの人形がいる。ネズミの人形は、隠れているようにも見える。必死にしがみついている。クマの人形は、このネズミの人形を必死に守っているようだ。クマの人形が切ない表情に見えることから、クマの人形はネズミの人形的心情を知っているのかもしれない。ネズミの人形に何があったのか。ネズミの人形は何かに追われているのかもしれない。追われているとすればなぜ追われているのか。チーズを盗んだのかもしれない。しかし、盗んだとすれば、ネズミの人形が悪いので、クマの人形は守ることはしないだろう。ということは、違

う理由があるはずだ。親とはぐれたのかもしれない。クマの人形は、ネズミの人形をなぐさめているのかもしれない。なぜネズミの人形は親とはぐれてしまったのか。捨てられたのかもしれない。散歩をしていたらいなくなってしまったのかもしれない。(Gさん)

Gさんは、もはやクマと共にネズミに寄り添うパートナーになっている。クマと共に、ネズミを気遣い、あれやこれやと共に悩んでいる。まさに「関係的記述」として捉えられるべき記述なのだ。Gさん自身、記述の中であらゆる可能性を立てて、それに対して考察を加え、自ら立てた可能性を否定している。「盗んだとすれば、ネズミの人形が悪いので、クマの人形は守ることはしないだろう」という言葉には説得力がある。ただ問いを立て、可能性を列挙するだけでなく、それを吟味することも実践記録においては可能なのである。保育や児童福祉などで求められる人間というのは、外側から物事を規定したり判断したりする人間ではなく、Gさんのように、関係の内で、共に悩み、共に考えるパートナーなのではないだろうか。

最後に、「たどたどしくてもよい。器用に書けなくてもよい。詩的になってもよい。比喩表現になってもよい。実践記録にとって大切なのは、外側から言葉で対象を規定することではなく、関係の内に入り、そこから言葉を見つけ出していくことです。関係の内で見つけた言葉は、何よりも説得力があります。そういう言葉を記録で書けるようになれるといいですね」、と話して、フィードバックの授業を終える。

このフィードバックを通じて、学生たちは次のような感想をコメントカードで述べている。

今回の授業で、自分が普段いかに何も考えずに文章を書いているかを感じました。今回はできるだけ主観を使わずに書く、ということに注意しながら書きましたが、そうやって意識しながら文章を書くことで上達できるのだらうと思います。(Hさん)

今までの自分の文章のことを考えてみると、ずっと丁寧_に書けてない気がしました。自分のクマの記録を

改めて読むと、主観的なことばかりで、読んでいても全くクマの様子が分かりませんでした。これでは記録になっていないですよ。(Iさん)

私は、ほぼ毎日ブログを書いているし、文章を書くことをそんなに苦に思ったことはありませんでした。でも、本当はまだまだ文章力が足りなくて、接続詞を使うのが下手だということが分かりました。…字体のことは他の先生にも注意されたので意識していきます。書くことについて色々と反省させられました。(Jさん)

クマの観察の記録を書くだけでも、もっと詳しく、もっと上手にできることを知り、自分の普通さにびっくりしました。でも、文章力がなくて焦るのではなく、日頃から物事を考えて、どんどん文字にしていこうと思いました。一つの物に対して、もっと深く、色々な視点から考えてみようと思いました。実習記録も、たいへんだと思いますが、いろいろ考えて書きたいです。(Kさん)

私は今まで記録を書いてきて、物事は断定しなればならないと思っていた。比喩などは、まわりくどいと思われると思い、使っていなかった。そして、小さなところ(他の人が目を向けられないところ)にも目を向けること、自分以外の視点からも考えてみることなども私のできていない点だった。これらの点に注意して、印象に残るような記録を書けるように訓練したい。しかし、良い記録だと思われるには文章に説得力が必要だと今日の授業で聞いた。私には説得力のある文章というのがまだよく分からない。説得力のある文章を目指して頑張りたい。(Lさん)

5. その後の指導内容について

フィードバックの後の授業は、まず前回の授業の感想(コメントカード)を読み上げて、シュピングの一つの事例を読み、コミュニケーション(対話、人間関係)を描写する際の三つのポイントを浮き彫りにする。

●言語

●身振りと手振り

●X(言語化されず、知覚することもできないもの)

この三つのポイントに関しては、次回の授業研究で示すことにしたい。今回のこのノートでは、クマとネズミの人形の実践の報告に留めることにする。

おわりに

実践記録を書くことは、「実践者の質」の向上には欠かせない作業の一つである。実践記録を書くことを通じて、われわれは日々の実践を振り返り、反省し、新たな展開を見出していく。だが、現存の保育士・教員・社会福祉士等、養成高等教育機関では、実践記録の書き方についての指導があまり徹底されていないようにも見える。すでに大学院等での事例研究では、かなり徹底された記述の指導が行われているものの、学部生への指導はなかなか十分とはいえない(実践記録が、研究者の手段としてのみ重視されているということに起因するのかもしれない)。私自身、学部生のときに、実践記録の書き方について学んだことはなかった。もしかしたら、実践記録の書き方は教育機関で学ぶべきことではないのかもしれない。だが、現状の大学生や短大生を見る限り、一部の学生を除いては、しっかりとした実践記録を読んでいるとはいえないし、実習記録も「感想文」の域を出ないものが実に多い。現場に出てしまえば、実践記録の書き方を教わる機会は皆無に等しい。

だが、実践記録は本来実践者に属する事柄であるはずである。研究のための記録ではなく、実践者が生きた証であるはずである。実践者の言葉は、研究者の言葉よりも説得力があるはずであり、生きた言葉であるはずである。本レポートは、そうした問題意識をもつ筆者なりに考え抜いた末の苦し紛れの教育実践の報告書である。今後も、生きた実践者の記述の向上に向けて力を注ぎたいと思う。

参考文献

H.G. Gadamer, *Gesammelte Werke I Hermeneutik I*, Mohr Siebeck, 1990.

鯨岡峻、エピソード記述入門－実践と質的研究のために、東京

大学出版会、2005

シュヴァイング、精神病者の魂への道、小川信男・船渡川佐知子

訳、みすず書房、1966